平成１５年度卒業論文

『カラマーゾフの兄弟』論

言語文学専攻

指導教員　安藤　厚

氏名　桃井　富範

「目次」

プロローグ

１、　　問題提起

モークロエ村の場面の図式

モークロエ村の人物設定

２、　　カーニバル論による分析

カーニバル論による役割分析

ちぐはぐな組み合わせ

マクシーモフとカルガーノフのコンビ

ヴルブレフスキーとパン・ムッシャーロヴィチのコンビ

カーニバル論による役割分析の結論

３、　　聖書との比較分析

ドストエフスキーと聖書について

ソドム содом という言葉

聖書におけるソドムの紹介

『ソドムの滅亡』とモークロエ村の場面の共通性

『ソドムの滅亡』の図式

ロトとグルーシェニカの類似性

ソドムの男達とドミートリーとの類似性

御使いとヴルブレフスキー、パン・ムッシャーロヴィチ

マクシーモフ・カルガーノフとロトの娘達

ロトの妻とドミートリー

聖書のパロディーの結論

展開の異なり

４、　　作者の真の意図を探る

ドミートリーとグルーシェニカのモークロエ村の場面の前後で変化する世界観

ドストエフスキーと新約聖書的（キリスト的）人類愛

イワンとドミートリー

エピローグ

プロローグ

本論では、『カラマーゾフの兄弟』の第８篇、７章の『まぎれもない以前の男 ПРЕЖНИЙ И БЕССПОРНЫЙ』、８章の『悪夢 БРЕД』に当たるモークロエ村の場面を、ドストエフスキーの人物配置の意図という観点からカーニバル論と聖書のパロディーという異なる２つの論点によって分析していきたい。

『カラマーゾフの兄弟』の、モークロエ村の宿の場面に関連した主なあらすじは以下のようである―カラマーゾフ家の長男であるドミートリー・カラマーゾフは父親であるフョードルと、グルーシェニカを巡って争っていた。ある夜、グルーシェニカがフョードルの家へ行ったと思い込んだドミートリーは、フョードルの家へ押しかけ、下僕のグリゴーリーを凶器で倒してしまう。その後グルーシェニカが過去の愛人と会うためにモークロエ村に向かったのだと知ったドミートリーは、自殺を決意し、最後に彼女を祝福するためにモークロエ村に赴く。

一方グルーシェニカは５年前に彼女を捨てたパン・ムッシャーロヴィチというポーランド人である愛人から思いがけず便りを受け取る。その時グルーシェニカは一切のものを投げ出して彼のもとへと赴く。ところが、宿屋で再会してみると、パン・ムッシャーロヴィチは、いやしい、金目当ての男に成り下ったことに気がつく。そこにはドミートリーも現れ、結局グルーシェニカとドミートリーは愛し合い、共に生きていこうとするのだが、まさにその最中にドミートリーは父親殺しの嫌疑で逮捕されるのである。

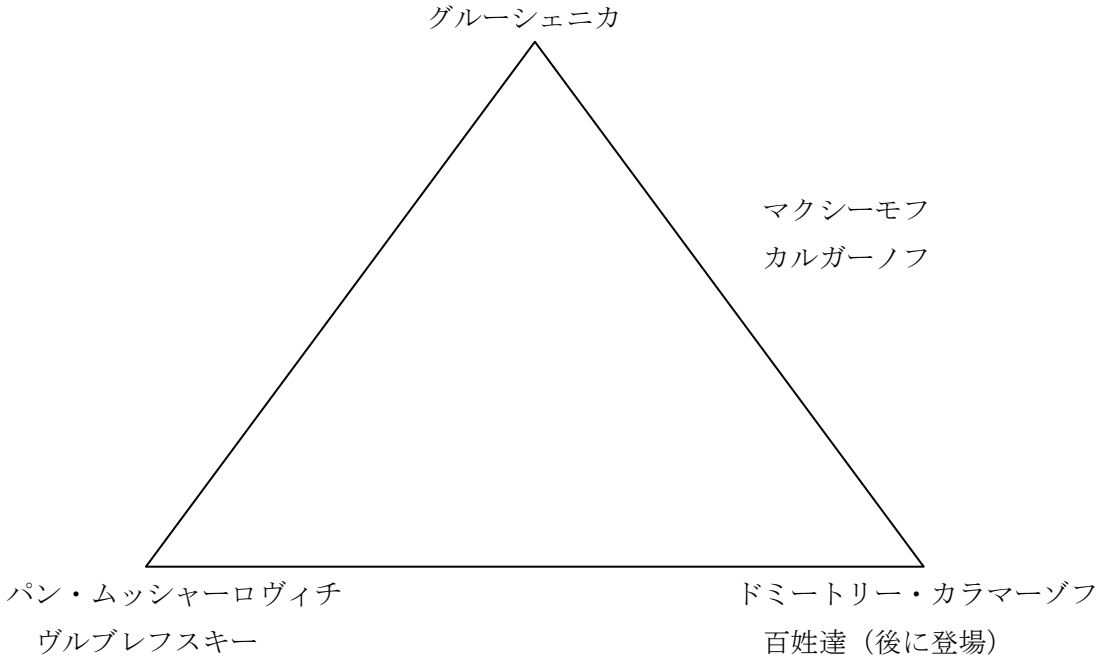
この場面は、ドストエフスキー最後の長編の中間に位置し、ポーランド人達のいかさまや、その後の馬鹿騒ぎ、ドミートリーとグルーシェニカが結ばれる感動のシーン、フョードル・カラマーゾフ殺しという大きな事件を伴って、物語の大きな転換点となっている。

本論のねらいは、前述した２つの論点からの分析によって、モークロエ村の場面が、作品全体の中でいかに機能したのかを理解し、カーニバル論からは作者の物語内での展開の技術を、また聖書のパロディー論によって作者の思想や宗教観を推測するものである。

1.　問題提起

モークロエ村の場面の図式

モークロエ村での場面を図式化して見ると、以下の図のようになる。この場面は、簡単に言ってしまえばグルーシェニカを巡っての、パン・ムッシャーロヴィチとドミートリー・カラマーゾフとの、三角関係の恋愛劇だという事が言えるだろう。マクシーモフとカルガーノフを三角形の右上に配置したのは、彼ら２人がドミートリー・カラマーゾフとグルーシェニカの共通の友人であり、同時にパン・ムッシャーロヴィチ、ヴルブレフスキーとは面識を持ってはいないからである。ヴルブレフスキーは、パン・ムッシャーロヴィチの供をしているので、その下に表記した。



モークロエ村の人物設定

次に、ドミートリーがグルーシェニカのいるモークロエ村の宿の青い部屋に入っていった時の部屋の中は以下のように描写されている。

「彼女はテーブルの横の肘掛け椅子に座っており、その隣には目鼻立ちのととのった、まだ非常に若いカルガーノフが座っていた。彼女は青年の手をとって笑っているらしかったが、青年は彼女を見ずに、テーブルをへだてたグルーシェニカの真向かいに座っているマクシーモフに、なにやら気色ばんだように、大声で何事か言っていた。そのマクシーモフはなにかひどく笑っていた。ソファには彼が座っており、ソファのわきの、壁際の椅子に見知らぬ男が掛けていた。[1]」（１４、３７５）

上の文章に出てくる「彼女」はグルーシェニカを指している。「彼」とはグルーシェニカの昔の恋人であるパン・ムッシャーロヴィチのことである。やくざなかつらをつけたポーランドなまりのロシア語を話すあまり背の高くないでっぷり太ったポーランド人である。「見知らぬ男」というのは、名をヴルブレフスキーという彼のボディーガード格である子分の背の高いポーランド人だ。

一読しただけではなんの変哲も無いように感じられるこの人物の配置だが、先程の図と比べながら注意深く読んでみるとこの場面で登場することに違和感、あるいは疑問を感じざるをえない 3 人の人物に気づくだろう。グルーシェニカの昔の男である小柄で太ったパン・ムッシャーロヴィチは物語の筋の中で必要な人間ではあるが、もう１人のヴルブレフ

[1] 『カラマーゾフの兄弟』の引用に関しては、（　）内に Полное собрание сочинений в тридцати томах / Ф.М. Достоевский ; глав. ред. В.Г. Базанов の巻数・頁数を記す。引用は『カラマーゾフの兄弟』／ド

スキーは、疑問符のつく３人のうちの１人である。というのも、長台詞の多いドストエフスキーの作品の中では例外と言っていいほどかれのセリフは短く、２人そろって言う台詞を入れても十数個しかない。またその内容も「この畜生め」（１４、３８９）や「良くもそんなまねができるもんだね、あんた」（１４、３８６）といった捨て台詞がほとんどで、行動ももう１人のポーランド人に付き従っているだけであり、最終的には「この淫売め」（１４、３８９）と言いかけた時にドミートリーにべつの部屋に担ぎ込まれてしまう。彼はドミートリーの常軌を逸した精神状態の中で、「この大男は恐らくソファの紳士の友人であり、ボディーガード格の子分に違いないし、パイプをくわえた小柄な紳士はもちろんこの大男に命令を下す身分なのだろう、という考えもひらめいた。しかしそれらも全てミーチャには、おそろしく立派な議論の余地のないものに思われた」（１４、３７５）と簡単に処理されてしまっている。

残りの２人はカルガーノフとマクシーモフの存在である。彼らは２人で修道院参りをしている最中で、チェールニからの帰りに泊まりに来てグルーシェニカ達と偶然一緒になったという設定になっている。物語の展開上ドミートリーが異常な精神状況の下にあり、カルガーノフが彼に同席を勧めたこともあって彼らの存在はドミートリーの感謝の念と共に読者の中で簡単に消化・正当化され、不自然さを与えてはいない。しかし彼らは物語の展開上、いてもいなくてもその後の展開に支障を来たさない脇役であり、だからこそ作者に、副次的ではあるが、より深い役割を与えられたと言う事もできる。

一度物語を離れ、作者の立場から観察してみることで、そこにドストエフスキーの何らかの意図があったと考えることはできないだろうか。

2. カーニバル論による分析

カーニバル論による役割分析

その意図として考えられるものの一つとして、モークロエ村の場面を劇的な変化の場面とするために作者が彼ら３人を配置したということが挙げられる。

「彼はいつでも最も異常な現実を取上げ、主人公を外部的、あるいは心理的にもっとも異常な状況下におき、そして凄まじい洞察力と驚くべき的確さで、その主人公の精神状態を物語るのだ！[2]」

ミハイル・バフチンによると、ドストエフスキーは以上のような特殊なプロット設定の中で社会的構造とそれにまつわる形式を取り払い、自由で無遠慮な人間同士の接触が力を持つようにし向けているのである。

更にバフチンはドストエフスキーの芸術理念と、製作における創作姿勢・創作方法の諸特徴を解明するに当たって、『カーニバル文学』という独特な概念を前面に押し出している。

ストエフスキー／原卓也訳／新潮社／１９７８年による。

[2] 『ドストエフスキーの詩学』／ミハイル・バフチン／望月哲男・鈴木淳一訳／筑摩書房／１９９５年／

ドストエフスキーは作品の内部でカーニバル化を行なうことにより、聖と俗、高級と低級、男と女等といった諸レベルでの混交を通して、社会の規範を相対化し、様々な極限状況の中での思想を試みているという。

「ドストエフスキーはカーニバル化のおかげで、通常の日常生活が営まれている条件下では明るみに出されることのないような様々な要素を、人間の性格や行動の中に見出し、そしてそれらを提示することが出来たのである。[3]」

それではカーニバルとは一体どのようなものであろうか？

バフチンによれば、カーニバルとは役者と観客の区別のない見せ物である。それは、通常の軌道を逸脱した生のことである。また、カーニバルの時には、通常の生の仕組みと秩序を規定している法や禁止や制限は、全て廃止させられる。社会のヒエラルヒーから生ずる不平等に基づくものが全て廃止させられるのである。そしてカーニバル特有のカテゴリーである、自由で無遠慮な人間同士の接触が力を得ることになる。また、カーニバルにおいては、外部の生活では万能の社会的ヒエラルヒーとは対立する、常軌を逸した場違いの、人間の相関関係の新しい様態が作りだされる。[4]

ちぐはぐな組み合わせ

その結果の一つとして「ちぐはぐな組み合わせ」が生じ、偉大なものと下らぬもの、賢いものと愚かなもの等々が近づき、結合する。

「同じく無遠慮な接触と結びついているのが、カーニバル的世界感覚の第３のカテゴリー、すなわちカーニバルにおけるちぐはぐな組み合わせである。自由で無遠慮な関係は価値、思想、現象、事物の全てに及ぶ。カーニバル外のヒエラルヒー的世界観の中に閉ざされ、孤立し、引き離されていたものの全てがカーニバル的接触や結合に突入する。カーニバルは神聖なものと冒涜的なもの、高いものと低いもの、偉大なものと下らぬもの、賢いものと愚かなものなどなどを近づけ、まとめ、手を取り合わせ、結合させるのである。[5]」

バフチンは、『ドストエフスキーの詩学』のなかで、『ボボーク』や『おかしな男』を題材にとって、ドストエフスキーにおけるカーニバル文学の分析を行っており、『カラマーゾフの兄弟』に関しても、カーニバル化の特徴を見出すことができると述べているが、具体的な分析は行ってはいないようであった。また、モークロエ村の場面では、先程の図を見ていただければわかるように、マクシーモフとカルガーノフ、パン・ムッシャーロヴィチ

２８８ｐ、１３

[3] 『ドストエフスキーの詩学』／３２９ｐ／１６

[4] 『ドストエフスキーの詩学』／２４８ｐ／１１２～２４９ｐ／１１７

[5] 『ドストエフスキーの詩学』／２５０ｐ／１１

とヴルブレフスキーというコンビが成立し、脇役としてではあるが、物語の展開の中で大きな役割を握っている。またバフチンは『白痴』のカーニバル論による分析の中でも、ちぐはぐな組み合わせについて言及している。[6]またこの場面は、後の馬鹿騒ぎのシーンに象徴されるように非常にカーニバル化された場面であり、３人の登場人物によってカーニバル化が促進されたのではないかと考えることができるのだ。ゆえに、モークロエ村の場面について、「ちぐはぐな組み合わせ」によるカーニバル化という観点から分析を進めていくことにする。

マクシーモフとカルガーノフのコンビ

今回の場面では、カルガーノフと地主のマクシーモフの、「お目当てはあんな人ってわけね」（１４、３９３）とカルガーノフがグルーシェニカに笑われる程のコンビが成立している。

ここでまずカルガーノフについて見ていくことにしよう。カルガーノフは第１部第２編『場違いな会合』の１である『修道院に到着』から登場しており、そこではアレクセイ・カラマーゾフの友人として紹介されている。この場面で注目したいのは、彼の乞食に対する行動である。

「乞食たちがとたんにわが訪問者をとりまいたが、だれ一人として何も恵んでやらなかった。ただカルガーノフだけは、財布から十カペイカ銀貨を一枚つまみだし、なぜかわからぬが妙にそわそわと照れて、一人の女にそそくさと握らせると、「平等に分けるのだぞ」と早口につぶやいた。…」（１４、３２）

またモークロエ村の宿屋の場面での彼の描写は以下のようである。

「彼はせいぜい２０歳くらいの青年で、しゃれた服装をし、実にかわいい色白の顔に、美しい豊かな栗色の髪をしていた。だが、この青年はときおりまるきり子供のような口のきき方や様子をし、自分でもそれを自覚しながら、いっこう平気なところがあったにもかかわらず、その色白の顔に輝く美しい明るい空色の目は、聡明な、時には年齢に似合わぬほど深淵な表情を宿すことがあった。」（１４、３７９）

ここで作者によって、カルガーノフが聖や美といったイメージを与えられているのが理解できるだろう。

次にマクシーモフの描写について観察してみたい。彼の登場もマクシーモフと同じ場面であるが、その描写はマクシーモフと対照がきわだっている。というのもマクシーモフは「フォン・ゾン(女をえさに魔窟に誘い込まれて殺された人物。当時世を震撼させた残虐な殺人事件の被害者)に生き写しだ」（１４、３４）と出会ったばかりのフョードル・パーヴロヴィッチ・カラマーゾフに酷評され、修道院からの帰りの場面では馬車に乗り込もうとして

[6] 『ドストエフスキーの詩学』ｐ３５２、１７～

イワン・カラマーゾフに胸を突き飛ばされすっ飛ばされている。この場面は「今日のエピソードをさらに完全にするような、ほとんど信じがたいほどこっけいな光景」（１４、８４）と描写されている。マクシーモフはその象徴なのだ。

この「聖と俗」のちぐはぐな組み合わせとそのコンビで展開される、低俗なポーランド人と結婚したがびっこだと判って結婚を取りやめた話等は、場の雰囲気をおとしめ、階層構造の敷居を無くし、対話を活発化させる潤滑油として作用しており、実際マクシーモフが語る、ゴーゴリの「死せる魂」の中で殴られた地主のマクシーモフとは自分のことだというでたらめな話の中で「打算抜きに彼の興味につり込まれていった」（１４、３８１）ドミートリーと「何時だい、君？」（１４、３８１）と退屈そうな顔つきでヴルブレフスキーに声をかけたグルーシェニカの昔の男が対照的に述べられ、そこでそのポーランド人は「どうして話をしちゃいけないの？他の人にも話させてあげればいいじゃないの。あなたが退屈だから他の人まで話しちゃいけないなんて」（１４、３８１）とグルーシェニカに喧嘩をふっかけられ、対話的関係になることを余儀なくされる。

バフチンはカーニバルのカテゴリーの１つとして卑俗化という概念をあげている。バフチンによると卑俗化はカーニバル流の聖物冒瀆、一大体系をなすカーニバル流の格下げや地上化、大地や肉体の奔放な力と結びついたカーニバル流の卑猥さ、聖典や格言のカーニバル流パロディーであり、またこの卑俗化は先に挙げたカーニバルの諸要素と関連しているという。[7]

モークロエ村の場面では、マクシーモフが話し、カルガーノフが合の手を入れる低俗な話がカーニバル化の入り口となっている。

ちなみにその後にドミートリーとポーランド人との間で行なわれるルールによっても、また幸運や偶然の女神に対しても同等の立場に立つ賭博の中でポーランド人達はいかさまをして、そこで両者の社会的地位は劇的に逆転するのである。

「賭博（サイコロ、トランプ、ルーレット等々）の本性―それはカーニバル的本性の事に他ならない。この事実は、古代、中世、ルネッサンス時代を問わず、常にはっきりと認識されていた。賭博の様々なシンボルはいつでも、カーニバルのシンボルのイメージ体系の中に組み込まれてきたのである。[8]」

マクシーモフとカルガーノフの存在理由についての疑問は以上のような意図をドストエフスキーが持っていたと考えることで解決する。

ヴルブレフスキーと、パン・ムッシャーロヴィチのコンビ

---

[7] 『ドストエフスキーの詩学』ｐ２５０、１６
[8] 『ドストエフスキーの詩学』ｐ３４４、１２

次に残った人物配置に疑問符がうたれる３人目の人物であるヴルブレフスキーの存在意義について考えてみたい。

この疑問にも先程述べたちぐはぐな組み合わせという論点から分析してみると、２人のポーランド人を、もう１つのコンビと考えることができる。まずモークロエ村の場面でのヴルブレフスキーの人物描写について見てみよう。

「もう一人の、壁際に立っているポーランド人（ヴルブレフスキー）は、ソファの男よりも若く、喧嘩を売るような小生意気な態度で一同を眺め、無言の軽蔑をこめてみなの話をきいていたが、この男もやはりソファに座っているポーランド人（パン・ムッシャーロヴィチ）とはおそろしいほど釣り合わぬ、度はずれの身長という点だけで、ミーチャを感心させた。」（１４、３７８）

この描写だけを見ても明らかに作者がパン・ムッシャーロヴィチの身長をもとにしてヴルブレフスキーを相対的に作り上げたことが容易に推測できる。また作品の中で大男 высокий пан とヴルブレフスキーが呼ばれ、パン・ムッシャーロヴィチを小柄な紳士 маленький пан と名づけられていること（１４、３８９）からもこの２人をちびとのっぽのちぐはぐな組み合わせと読み取れる。

ドストエフスキーはカルガーノフとマクシーモフのコンビとポーランド人のコンビとを対比することにより、グルーシェニカとドミートリーの地位構造を変化させぬままグルーシェニカの昔の男を、彼女を連れ去っていく鷹のような男からちびで太ったかつらをつけた鴨のような男、ただの道化者へと一気に転落させていくことに成功している。カーニバル劇の主流は、カーニバル王のおどけた戴冠とそれに続く奪冠であるとバフチンは述べているが、ドミートリーは部屋に入ってきた時の理由として「最後の時をこの部屋で過ごしたかったのです、かつての僕の女王を моя крулева あがめたこの部屋で」（１４、３７６）と言っているし、ちびのポーランド人も「女王様 моя царица のおっしゃること、法律です」（１４、３７７）とグルーシェニカに話しかけている。このことを踏まえるとこの場面をグルーシェニカの昔の男であるパン・ムッシャーロヴィチと、ドミートリーとの間での、女王の隣の席、つまり王座を争ってのカーニバル劇だと考える事ができる。そして実際の物語でも、グルーシェニカを連れ去っていくはずだったパン・ムッシャーロヴィチが博打でのいかさまの末に閉じ込められ、グルーシェニカを祝福しにやってきたドミートリーが彼女と結ばれる。

「カーニバルの戴冠と奪冠の劇は、無論様々なカーニバル的カテゴリーに貫かれている。つまり自由で無遠慮な接触（これは奪還式にきわめて強く現れる）、カーニバル的なちぐはぐな組み合わせ（奴隷と王）、卑俗化（最高権力の象徴を遊びの道具にする）等である。[9]」

[9] 『ドストエフスキーの詩学』ｐ２５３、１８

このように物語の筋の上では必要ない 3 人の登場人物は、王座を巡る奪還と戴冠というスキャンダルを演出するためのなくてはならない道化役として作者により絶妙に配置されたと推測できるのである。

カーニバル論による役割分析の結論

以上の分析から３人のサブキャラクター達は、モークロエ村の場面に、社会的ヒエラルヒーを無視した人間の相関関係の新しい様態を持ち込み、自由で無遠慮な接触を発生させ、戴冠と奪冠のカーニバル劇に仕立て上げるために用意されたと考えることができる。

このように 3 人の存在意義を規定することは可能であり、バフチンのドストエフスキー論のユニークさを再確認するとともに、テキストで具体的に検証することによってその整合性に驚かされる。

しかしドストエフスキーが人物描写の決定にあたり、カーニバル化や奪還と戴冠の儀式を促進するための「ちぐはぐな組み合わせ」を意識的に考慮・選択していたと言う点については、バフチン自身がその著書の中で明確に否定している。

「カーニバル化はドストエフスキーに対して、ちょうど十八、九世紀の大部分の作家に対してと同様、もっぱら文学的なジャンルの伝統として影響を与えたのであるが、そのジャンルの文学外的起源、すなわち正真正銘のカーニバルについては、彼は恐らくいかなる明解な認識さえ持ち合わせていなかったに違いない。[10]」

またこの理論はあくまでもドストエフスキーのジャンルとプロット構成上の特徴に関するものであり、この理論で可能なのはこの場面の喜劇的側面についての説明だけではないだろうか。つまり「ロシヤ文学全体を通して、詩的な美しさの点でドストエフスキーのこの場面に優る頁を見つけだすことは出来ない。これは凍てついた空間を自分自身の響きでみたすロシヤの天才、ロシヤの魂の幻覚である[11]」とウオルィンスキーも述べているこのモークロエ村の場面での、より高次な宗教的、形而上的側面を説明することは難しい。

カーニバル論はドストエフスキーが意識下に行なっていた方法論としての説得力には優れているが、その目的までもは明かしてはくれない。ドストエフスキーが行なった人物の描写の設定を論ずるには大変有効で説得力のある理論だが、人物の、不自然とも思えるような配置における作者の意図をこれだけで説明するには不十分だろう。とすると、ドストエフスキーの真の狙い、彼が意識下に行なったものではない、意図的な人物配置の理由というものがまた別の所にあったのではないだろうか。

---

[10] 『ドストエフスキーの詩学』ｐ３１５、１１１

[11] 『カラマーゾフの王国』／ウオルィンスキー／川崎侠訳／みすず書房／１９７４年　／ｐ２２、１１３

３．聖書との比較分析

ドストエフスキーと聖書について

吉村善夫氏は、「私はドストエフスキーの意図が極言すれば、文学者ドストエフスキーを何よりもまずキリスト教神学者であり、彼の文学作品を何よりも聖書の注釈書であると考えている[12]」と指摘している。事実『カラマーゾフの兄弟』を貫く大きなテーマとして神の存在の有無がえがかれていて、作者も「各編（『カラマーゾフの兄弟』の前身たる「偉大なる罪人の生涯」という題で構想されていた大小説の各編）を通じて一貫している問題は、私が生涯にわたって意識的にも無意識的にも苦しんできたもの、神の存在ということです。」と１８７０年３月２５日付のマイコフ宛の書簡の中で述べている[13]。ドストエフスキーにおけるキリスト教や聖書との関わりにも触れておきたい。ドストエフスキーは有名なペトラシェフスキー事件の刑罰として 4 年間の長きにわたる監獄生活を送った経験があるのだが、その時、デカブリストの妻であるフォンヴィ＝ジン夫人から１８５０年 1 月にロシア語訳された一冊の聖書を手渡された。4 年間の監獄生活での苦しみやその中で極悪非道な囚人達と接していく上で聖書の彼に果たした役割は、まさに決定的なものであったろう。彼自身流刑後の 1854 年２月の夫人宛の書簡の中で、「キリストより以上に美しく、深く、同情のある、理性的な、雄々しい完璧なものは何一つないということです。単に、ないというばかりでなく、あり得ない、とこう自分で自分に、激しい愛を持って断言しています。のみならず、もし誰かが私に向かって、キリストは真理の外にある、正真正銘、真理はキリストの外にあると証明するものがあっても、私は真理よりもむしろキリストと共にあることを望むでしょう[14]」と告白しており、彼と聖書との深いつながりを疑うことはできない。

彼がアレクセイ・カラマーゾフのように神に対して忠実であったか、それともイワン・カラマーゾフのように懐疑と不信に苦しんでいたかということについては議論の尽きないところだろうが、「文学は－人間のあらゆる生活の表現である」（メモ・ノート１８６０～１８６２より）[15]という信念を持ったドストエフスキーにとって、信仰や宗教、キリスト教や聖書についての問題は作品における欠かせないテーマであったろう。

ソドム содом *という言葉*

そう考えてみると、モークロエ村の場面でヴルブレフスキーが、数少ない台詞の中で言っている一つの言葉が持つ重みに対して気づかされる。それは彼らポーランド人達が、ドミートリーからグルーシェニカとの手切れ金としての金を受け取りかけて、金目当てで結婚しに来たことが明らかになり、彼女に散々罵倒されたあと、ふいにドミートリーが呼び集めた村の娘達のコーラスが隣部屋で鳴り響いた時、その混乱の中でいう言葉である。「ま

---

[12] 『ドストエフスキイ～近代精神超克の歴史』／吉村善夫／神教出版社／１９６５年／ｐ２、ｌ１７
[13] 『ドストエフスキーの手紙』／中村健之助編訳／みすず書房／１９８８年／ｐ２７０、ｌ１０
[14] 『ドストエフスキーの手紙』／ｐ８８、１１０
[15] 『ドストエフスキー未公刊ノート』／小沼文彦訳／筑摩書房／１９９７年／ｐ６

るでソドムだ！ - То есть содом! -」（１４、３８８）
　実を言うとこのソドムという聖書にでてくる言葉を発するのは、実は彼が始めてではない。ドミートリーが末弟であるアレクセイ・カラマーゾフとの、カテリーナ・イワーノブナについての秘密を明かす前置きの会話の１つの台詞の中で４度にもわたってソドムという言葉を使っているのである。

「美か！そのうえ、俺が我慢できないのは、高潔な心と高い知性とを備えた人間が、マドンナの理想空出発しながらソドムの理想に堕してしまうことなんだ。それよりもっと恐ろしいのは、心にすでにソドムの理想を抱く人間がマドンナの理想をも否定せず、その理想に心を燃やす、それも本当に、清純な青春時代のように、本当に心を燃やすことだ。……ソドムに美があるだろうか？本当を言うと大多数の人間にとってはソドムの中にこそ美が存在しているんだよ。」（１４、１００）

　ドミートリーの悲劇的な性格を表すソドムの理想とマドンナの理想について今は触れないが、ヴルブレフスキーの口から突然ついて出たように思われるソドムという言葉が、実は「カラマーゾフの兄弟」という作品の全体を通して、というと語弊があるかも知れないが、少なくともドミートリーの物語の中では一つの大きなキーワードとして作用していると考えてみること、そしてドストエフスキーがヴルブレフスキーの口を通してこの言葉を語らせたという事実に、何らかの意図を読み取ろうとすることは十分に可能だろう。

聖書におけるソドムの紹介
　さてソドムとは、旧約聖書の中で神の怒りによってゴモラと一緒に滅ぼされる街の名であり、英語で男色をあらわすソドミーの語源ともなっている。旧約聖書でソドムについて書かれているのは創世記の１3 章から 19 章までで、アブラム(後のアブラハム)の孫、ロトがソドムに移住したこと、ソドムの住民が邪悪で、主に対して多くの罪を犯していたこと、王達が争い、ソドムからロトが財産もろとも連れ去られるが、アブラムにより取り戻されること、アブラハムが神にソドムを滅ぼさないようにとりなすこと、神がロトの家族をつれだし、ソドムを滅ぼすことが記載されている。中でも 19 章の「ソドムの滅亡」は、物語として読んでも面白い有名な場面である。

『二人の御使いが夕方ソドムに着いたとき、ロトはソドムの門の所に座っていた。ロトは彼らを見ると立ち上がって迎え、地にひれ伏して、言った。「皆様方、どうぞ僕の家に立ち寄り、足を洗ってお泊まりください。そして、明日の朝早く起きて出立なさってください。」彼らは言った。「いや結構です。私たちはこの広場で夜を過ごします」。しかしロトがぜひにと勧めたので、彼らはロトのところに立ち寄ることにし、彼の家を訪ねた。…彼らがまだ床に就かないうちに、ソドムの町の男たちが、若者も年よりもこぞって押しかけ、家を取り囲んでわめきたてた。「今夜おまえのところへ来た連中はどこにいる。ここへ連れてこい。なぶりものにしてやるから。」ロトは、戸口の前にたむろしている男たちのところへ出て行き言った。「ど

うか、皆さん、乱暴なことはしないでください。実は私にはまだ嫁がせてはいない娘が二人おります。皆さんにその娘を差し出しますから、好きなようにしてください。ただ、あの方々には何もしないでください。この家の屋根の下に身を寄せていただいたのですから。」男たちはロ々に言った。「そこをどけ。」「こいつは、よそもののくせに指図などしおって。」「さあ、彼らより先にお前を痛い目にあわせてやる。」そして、ロトに詰め寄って体を押しつけ、戸を破ろうとした。二人の客はその時、手を伸ばして、ロトを家の中に引き入れて戸を閉め、戸口の前にいる男たちに、老若を問わず、目潰しを食わせ、戸口を分からなくした。二人の客はロトに言った。「ほかに、あなたの身内の人がこの町にいますか。あなたの婿や息子や娘などを皆連れてここから逃げなさい。実は、私たちはこの町を滅ぼしに来たのです。大きな叫びが主のもとに届いたので、主は、この町を滅ぼすためにわたしたちを遣わされたのです。」…夜が明けるころ、御使いたちはロトを急きたてて言った。「さあ早く、あなたの妻とここにいる二人の娘を連れていきなさい。さもないと、この町に下る罰の巻き添えになって滅ぼされてしまうぞ。」ロトはためらっていた。主は憐れんで、二人の客にロト、妻、二人の娘の手をとらせて町の外へ避難するようにされた。彼らがロト達を町外れへ連れ出したとき、主は言われた。「命がけで逃れよ。後ろを振り返ってはいけない。低地のどこにもとどまるな。山へ逃げなさい。さもないと、滅びることになる。」…主はソドムとゴモラの上に天から、主のもとから硫黄の火を降らせ、これらの町と低地一帯を、町の全住民、地の草木もろとも滅ぼした。ロトの妻は後ろを振り向いたので塩の柱になった。…[16]』

『ソドムの滅亡』とモークロエ村の場面の共通性

破滅していく存在であるドミートリーと、カラマーゾフ的生から抜け出し新しい世界に旅立っていこうとするグルーシェニカ、そして彼女を迎えにきたパン・ムッシャーロヴィチが一堂に会するモークロエ村の場面を思い描くにあたり、作者が選民の救済と罰する存在としての神がテーマになっている『ソドムの滅亡』についてのシーンを意識していなかったということは先に述べたドミートリーやヴルブレフスキーが作品の中でソドムという言葉を使用していたことやドストエフスキーが聖書に通暁していたことを引き合いに出すまでもなく明らかに考えずらいことである。そうでなくともドストエフスキーは、聖書やキリスト教にまつわる出来事や人名を作品内に登場させることを好んだ。そのことについては江川卓氏の一連の『謎解き』本の中で詳しく述べられているが、氏はドストエフスキーのそういった象徴性をあらわす資料が乏しいことについても触れている。

「名匠気質というのか、ドストエフスキーは小説の創作にあたって、ネタの割れてしまうこと、つまり、自身の秘めた存念が生に出てしまうことを何よりも恐れた。その結果、うわべはことさらさりげなく、うっかりすると、気にもとめず読みすごしてしまいそうな文章の背後に、実は作品の根本テーマが隠されているといった、二重、三重仕立てのテキスト構造ができあがった。…比喩的な言い方をすれば、小説の全体が、名匠の手になる精巧なからくり装置のような観を呈していて、ふつうの目では容易にその仕掛けが

[16] 『聖書』／日本聖書教会／１９９５（以下の聖書の抜粋は全てこの著書による）

見破れない。[17]」

しかしそのような中でも比較的読者にわかりやすいからくりも存在する。「カラマーゾフの兄弟」の作品内でも、例えばラキーチンがアレクセイ・カラマーゾフをグルーシェニカのもとへ連れて行き、「友を売った」代償に２５ルーブリの金を受け取った際に、「君は今、例の２５ルーブルのことで俺を軽蔑しているんだろ？真の友人を売ったといいたいんだな？しかし、君はキリストじゃないし、俺もユダじゃないよ。」とアレクセイにわざわざ念を押す、銀貨３０枚と引き替えの、ユダのキリストに対する裏切りをもじった場面を登場させたりしている。（１４、３２５）[18]

また、父親殺しの容疑で捕らえられたドミートリーの裁判の場面、第１２編「誤審」の中の第１３「思想の姦通者」のなかで、弁護人の発言の中にソドムに関連する台詞が登場する。それは「《金属》や《硫黄》"металла" и "жупела"」という言葉で、生格の形で二度登場する。（１５、１７０：１７１）原氏訳の『カラマーゾフの兄弟』の中には、この部分に訳注がついている。

「オストロフスキーの戯曲「重苦しい人々」の中のナスターシャ。この場合の「硫黄」は旧約聖書「創世記」でソドムとゴモラの街を焼いた硫黄のこと。[19]」

作者がオストロフスキーの戯曲からわざわざ《金属》や《硫黄》"металл" и "жупел"という言葉を引用していることからも、旧約聖書の『ソドムの滅亡』の知識があったということが証明できる。

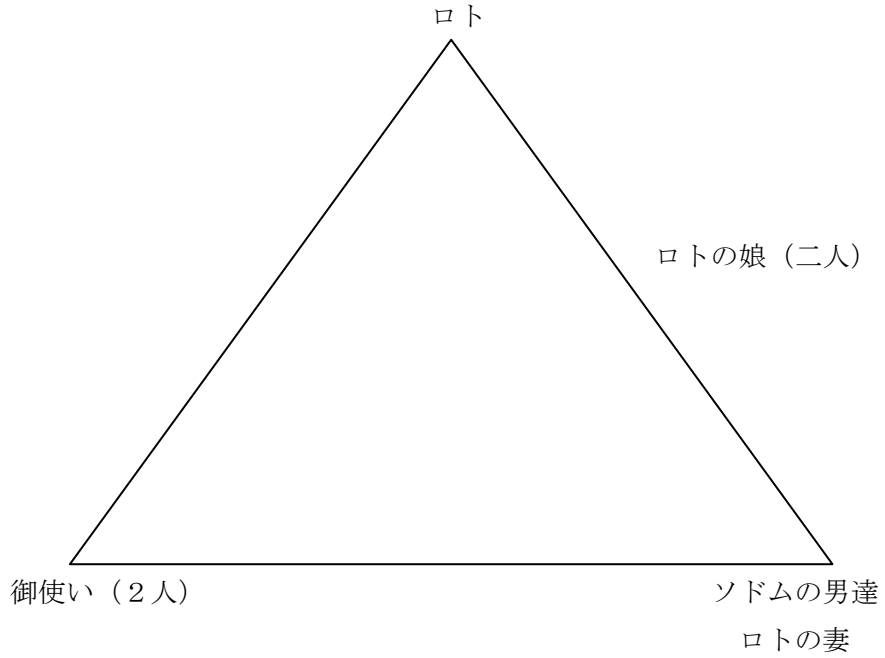
『ソドムの滅亡』の図式

『ソドムの滅亡』の御使いがロトの家に宿泊するシーンの主要なキャラクターの人物像を図式化してみると以下の図のようになり、モークロエ村の場面と同じくロトを巡っての三角関係と言うことができるだろう。ロトの妻はソドムの滅亡の際に後ろをふりむいて塩の柱になってしまったので、ソドムの男たちと同じ場所に記入した。ロトの娘たちは、ロトとロトの妻の中間に位置させた。モークロエ村の場面の図式と比較してみると、その類似性を理解していただけるだろう。

次に、『ソドムの滅亡』とモークロエ村の場面との各登場人物の類似点について比較分析してみることにしよう。

---

[17] 『謎解き罪と罰』／江川卓／新潮社／１９８６／ｐ１８．ｌ１１
[18] 『謎解きカラマーゾフの兄弟』／江川卓／新潮社／１９９１／ｐ１８２、ｌ１



ロトとグルーシェニカの類似性

第一にロトとグルーシェニカとの類似点について比較検討してみたい。『ソドムの滅亡』の中では、先程の聖書の引用でもわかるように、ロトは訪れてきた御使いによって家族と共に連れ出され、滅亡をまぬがれる。グルーシェニカはパン・ムッシャーロヴィチのもとへ向かう直前、自分を現在の生活から救ってくれるだろう彼への期待を胸に、「アリョーシャ、お兄さんのミーチェニカによろしくね。あたしはいけない女だけれど、恨みに思わないように言ってちょうだい」（１４、３２４）「帰って、帰ってちょうだい、もうあなたたちを見ずにすむように、みんな帰って、グルーシェニカは新しい生活に旅立ったのよ」（１４、３２４）とアレクセイとラキーチンとの会話の中で彼らに向かって叫んでいる。この台詞は単に彼らに別れを告げるばかりではなく、ドミートリーやフョードル・パーヴロヴィッチ・カラマーゾフ、彼女自身が長い間浸ってきたソドム的な美や奈落の生活全てからの決別を表明しているものである。ソドム的生活からの決別を告げ、新しい生活に踏み出そうとする彼女と、旧約聖書に登場するロトは、共に他力によって救済されゆく存在であるという点で共通している。

ロトとグルーシェニカとの類似はこれだけではない。ロトは聖書における人物研究の中で一般的に義の人と見なされている

「神は不道徳な者たちのみだらな言動によって悩まされていた正しい人ロトを、助け出されました。なぜなら、この正しい人は、彼らの中で生活していたとき、毎日よこしまな行為を見聞きして正しい心を痛めていたからです。」（ペトロへの手紙２：７～８）

---

[19] 『カラマーゾフの兄弟（下）』ｐ４４２、１４

グルーシェニカもまたポーランド人の将校に騙され、嫉妬深い商人サムソーノフに拾われるまでは「内気ではにかみやの、ほっそりときゃしゃな、ものおもわし気に愁いを秘めた少女」であった。それはまた生活にも表れていて、「グルーシェニカの生活は極めてつつましく、家具調度もいたって貧しかった」とドストエフスキーによって清廉さが強調されており、さらには「元来が堅気の聖職者の家の出で、非常勤の助祭か何かの娘だという説もあった」と神に仕える人間の娘という身分すら与えられ、信仰の父と呼ばれるアブラハムの甥であるロトと同様に、『聖』のイメージが強調されている。（１４、３１０：３１１）

また、ロトはソドムが戦いで敗れた時に捕えられ、アブラハムに助け出された後にも（創世記１４：１６）ソドムから離れることはなく、罪と腐敗の街であるソドムに住み続けた。そういった理由から、信仰の父である叔父のアブラハムと一緒に旅する事をやめ、それぞれ別の道を歩み始めてから（創世記１３）は、霊的な事柄よりも物質的なこと、安逸、安楽に心が引かれた人であるとも考えられている。グルーシェニカもまた、パン・ムッシャーロヴィチに捨てられ、その後に吝嗇な商人であるサムソーノフに拾われてから、「大胆な決断的な性格の女性になり、傲慢で、人を人とも思わず、利殖の才に長け、けちで慎重で手段を選ばぬ、儲け上手であって、世間の評判ではいち早くもう自分の財産を作り上げた」（１４、３１１）男を惑わすむっちりとしたロシア美人へと変化を遂げる。彼女は天使のような心を持つアレクセイ・カラマーゾフを誘惑しようとしたり、ドミートリーの正式な許嫁である誇り高いカテリーナ・イワーノブナに侮辱を与えたりする。それはグルーシェニカが美しい心を秘めてはいるものの、一重に自分の受けた侮辱に執着し、自分の悪意を愛する事だけが彼女の生きる精神的な糧となっているからだ。彼女は悪意の衣をまとったまま「堕落の底に身を沈め、深き汚れに閉ざされている」のであり、この点でも邪悪な街であるソドムに住み続けているロトと何か通じるものがある。

またロトは、神にソドムが滅ぼされると告げられた時に、それでもなおためらっていたこと（創世記１９：１６）や、神の山へ逃げろという命令に対しても弱音をあげていること（創世記１９：１７～２２）から、ふらつきやすい人物とも理解されている。グルーシェニカもまた、5年前に彼女を誘惑して捨てたパン・ムッシャーロヴィチがモークロエ村から使いをよこしてきた時、もう彼のことを「心の中ではとっくに許していること」を以前は誘惑しようとしたアレクセイとの会話の中で気づかされる。しかしそれまでは、パン・ムッシャーロヴィチに対して「だってあたし、ことによると、今日そこへナイフを持っていくかも知れないもの、まだその決心はついてないけど…」（１４、３２０）と表面で煮えたぎる悪意を顕わにする。グルーシェニカの葛藤の原因となるものは、以前彼女を捨てた男に対する憎しみと怒りであり、ロトが神の命令に逡巡した理由は、恐らく信仰の理由であろうが、ここでも似通った点が見られる。

ソドムの男達とドミートリーとの類似性

次にソドムの男達とドミートリーについて比較してみたい。『ソドムの滅亡』の中でソドムの男達は、神が降らせた硫黄の火によってソドムやゴモラの街と一緒に滅ぼされる。ドミートリーもグルーシェニカがパン・ムッシャーロヴィチのもとへ向かったと知ると、「自己を処刑し、罰する」とペンでしたためられた遺書をポケットに入れ、自殺のためのピストルを調達し、「…とにかく悪臭をはなつ一匹の虫けらをひねりつぶす必要があるんだ。そいつがその辺を這いまわって、他人の生活を台無しにしないようにね…」（１４、３６６）と自分で死を選ぶことを決意している。神によって滅ぼされるか、あるいは自分で死を選ぶかという違いこそあれ、彼らは両者とも滅びゆく存在として描かれている。

ソドムの男達は旧約聖書の中でロトの家で宿泊している御使い達をなぶりものにしてやるために彼らの家に押しかける。そして「さあ、彼らより先に、お前を痛い目にあわせてやる。」といってロトに詰め寄り、戸を破ろうとする。ドミートリーもまたグルーシェニカに恐れられており、彼女がモークロエ村に行く直前のアレクセイとラキーチンとの会話の中で、ドミートリーがそのことを知っているかどうか聞かれた時に、グルーシェニカは「知るわけがないでしょうに！全然知らないわ！知ったらあたしを殺すに違いないわ！」（１４、３１６）と言っている。またドミートリーがモークロエ村の宿のグルーシェニカ達がいる部屋にあらわれた時も、彼女は「あれ！」（１４、３７５）と怯えた悲鳴をあげている。彼らは招かれざる客という共通点もある。

彼らが押しかけた時間帯について比較してみたい。ソドムの男達がロトの家にあらわれた時の記述は、「彼ら（ロト達）がまだ床につかないうち」としか書かれてはいない。しかし御使いがソドムについたのが夕方で、その後にロトが御使い達に食事を供し、彼らをもてなした、という内容が書かれているので、ソドムの男達がやってきたのは最低でも一般の晩餐の時間よりは遅い時間だと思われる。ひょっとするとロト達はもてなしの饗宴をしていたかも知れないから、深夜とまでは行かなくてもいつもよりは遅くまで起きていたとも考えられる。一方ドミートリーがモークロエ村にやってきた時には、モークロエ村は「この時刻にはすっかり眠りに沈み、わずかにそこかしこで闇の中からまばらな燈火がまたたいているだけだった」。彼は、恐ろしい不安に駆られながら、「もし連中が寝ていたらどうしよう！」と叫んでいる。しかし宿屋の窓はみな明るく輝いていて、グルーシェニカ達はまだ眠ってはいなかった。このようにドミートリーとソドムの男達との間には、押しかけていく時間設定の類似も見られる。

ドミートリーが１人の人間であるのに対して、ソドムの男達は複数であるという違いについても触れておきたい。確かにロトの家に押しかけたのは、老若を問わないソドムの男達であり、グルーシェニカのいる部屋に入っていったのはドミートリーただ１人である。だがドミートリーは宿に入るやいなや、主のトリフォンに向かって、「今度はいちばん肝心の点を答えるんだ。ジプシーはいないのか？」（１４、３７４）と質問していて、ジプシーはいないが、シンバルを叩いたり、バイオリンを弾いたりするユダヤ人がいるということを聞くと、「よびにやれ、ぜひよぶんだ！」（１４、３７４）と叫んでいる。またトリフォ

ンに「わたしだったら、どの娘っ子だって膝で蹴り上げて、それさえ光栄だと思わせてやりまさあ。その程度のれんちゅうですよ！」（１４、３７４）と罵られる百姓の娘達を呼び集め、「どんちゃん騒ぎといってもいいほどの派手な宴会」を開こうとする。ヴルブレフスキーが「まさにソドムだ！」と叫んだのが、左隣の部屋で、やっと顔の揃ったモークロエの娘達のコーラスがひびきわたった時だった。そのことを考えてみても、ここではドミートリーが単なる一個人としてではなく、たくさんの「虱ったかり Вшивость」（１４、３９１）の象徴としての存在意味をもって描かれていることが理解できるだろう。

御使いとヴルブレフスキー、パン・ムッシャーロヴィチ

御使いと二人のポーランド人の類似性を説明することは容易だろう。旧約聖書の中で御使いは邪悪な街であるソドムが神によって滅ぼされる時に、ソドムからロトとその身内を助け出すためにやって来る救い主としてえがかれている。パン・ムッシャーロヴィチもまたグルーシェニカにとっては新しい生活へと彼女を導いてくれる『ソドムの滅亡』の中でいう御使いのような存在だったろう事は、上に述べたグルーシェニカとロトとの比較のなかで明らかである。付け加えるならば彼女はモークロエ村から彼の手紙が来た後の会話の中で「あたし、これまでずっと、あなたのような人を待っていたのよ。だれかそういう人が来て、あたしを許してくれるって、知っていたわ。」（１４、３２３）と以前は誘惑しようとしていた天使のような心を持ったアレクセイ・カラマーゾフと始めて心を通じ合わせ、『聖』のイメージを取り戻す。

ところでパン・ムッシャーロヴィチは５年前にグルーシェニカを捨て、他の女と遠くへ去ってしまい、それが原因で彼女はすさんだ生活を送るようになり、精神は憎悪と侮辱で満たされるようになってしまっている。だからパン・ムッシャーロヴィチと御使いとの間に共通点があると考えることに違和感を持たれるかも知れない。しかし家畜を飼う者同士の争いが原因で信仰の父である叔父のアブラハムと決別してから（創世記１３）というもの、ロトは邪悪な街であるソドムに天幕を移動して移り住むようになる。それから何度も災難に遭遇するのだが、神の祝福を受け続けたアブラハムとは対照的に、ロトはソドムの滅亡（創世記１９）まで神とは一切の接触がない。パン・ムッシャーロヴィチを単に御使いと比較するばかりではなく、もっと視野を広げて御使いにあらわされる、神も含めた霊的な存在と比べてみると、「一度は突き放され、見放された後の救済」という点で、ここにもストーリー上の一致を見出すことができるだろう。

前述の通り、グルーシェニカにとって、パン・ムッシャーロヴィチは彼女を破滅から救い「新しい生活」に連れ出せる唯一の人間と思われていた。「ソドムの滅亡」の中でいえば、まさに天からソドムへと遣わされてくる御使いの立場であり、ドストエフスキーがこの場面を真似したとするなら、彼らが２人いるというのは当然の事である。そして、実は彼らが何故ポーランド人であるかという疑問も、彼らが御使いの役を演じていると考えることで、おもしろい答えが導かれる。

ここで触れておきたいのはポーランド分割の歴史である。ポーランドは、ロシア・プロイセン・オーストリアの３国による、３次に渡る分割（１７７２・９３・９５）の結果、世界地図の上から完全に姿を消し、念願の独立は、１９１８年、第一次大戦とロシア革命の結果、ポーランドを分割していた３帝国が倒れるまでもたらされることはなかった。モークロエ村でドミートリーがロシアに乾杯しようとした場面でも、ポーランド人達はグラスに手も触れず、代わりに「１７７２年以前のロシアのために」（１４、３８３）と言ってからグラスを空けている。ご承知の通りドストエフスキーの生没年は１８２１～１８８１年であるから、彼の存命中、ポーランドという国はこの世に存在しなかったのである。つまりドストエフスキーがグルーシェニカの昔の男とヴルブレフスキーを御使いに当て嵌めようとした時、彼らを神の国、つまりこの世にない国から訪れたことにする必要があったのである。だから作者は神の国の代わりとして、世界地図上から姿を消したポーランドに白羽の矢を立て、彼らをポーランド人に設定することによって彼らが御使いの役を演じていることを暗示したのだろう。上に述べた考えは行き過ぎた想像と思われるかもしれない。しかしドストエフスキーは作品に登場する名前や数字に何らかの含みや暗喩を持たせることを好んだ。それは、先程紹介した江川卓氏の著書の中で詳しいが、例えば「罪と罰」のラスコーリニコフの名前に、分離派教徒の意味や、かち割ることという意味を持たせたり、この作品内でも、「カラマーゾフ Карамазов」という姓そのものに、黒く塗られた、という意味を込めたりしている。彼らがポーランド人である理由についても、ドストエフスキーがポーランド人嫌いだったからというような感情論でとらえるのではなく（ドミートリーが、カルガーノフにポーランド人の悪口はやめたほうがいいと言われた際、彼は「あいつに卑怯者と言ったからって、ポーランド全体を卑怯者と言ったことにはならないんだから．一人のろくでなしだけでポーランドが成り立っているわけじゃないんだ。」（１４、３９８）としっかりことわっている）、このシーンを旧約聖書と見立てた時に、ドストエフスキーが 1 つの謎かけをしたと一連の流れで考えた時に初めて答えが割り出せるのではないのだろうか。

マクシーモフ・カルガーノフとロトの娘達

次に、マクシーモフとカルガーノフがロトの娘とを比較してみたい。カルガーノフは、どんちゃん騒ぎの中で「坊や」мальчик とよばれ可愛がられている。「なんて可愛いんだろう、とっても素敵な坊やだわ。"Какой он миленький、 какой чудесный мальчик!"」（１４、３９１）「…あら、ちょっと見て、坊やが寝てしまったわ。可愛い坊や мальчик-то мой」（１４、３９２）といったふうである。しかもこの可愛がり方は、ドミートリーに対する時に送る熱いまなざしとは全く異なり、カルガーノフに劣情を抱かせはしない。彼にキスをしたりもするが、そのときの描写は「感動したように身をかがめて нагнувшись над ним в умилении」（１４、３９３）なのである。マクシーモフもまた、カルガーノフと息の合ったコンビを組んでいるだけではなく、グルーシェニカには「おじいちゃん」

"старикашка"、と呼ばれて嬉しそうに彼女に接吻している。また、ドミートリーの予審のさいには彼女に寄り添い、「ときおり彼女に向ってべそをかきそうになり、青い縞のハンカチで目をぬぐっていて」彼女が彼を慰めてやるというまるで母親が子供をあやすような一幕すらある。（１４、４５３）彼ら２人は当然性別も男であり、厳密な意味での娘というわけではない。しかし、それはドストエフスキーがロトの娘の代わりとして彼らをここで登場させたということについて何ら否定するわけではないだろう。そもそもロトとして登場しているのが女のグルーシェニカという仮説なのである。そう言った点を細かくつきつめていくと、確かに『ソドムの滅亡』とは食い違う点も多々ある。しかし、カラマーゾフの兄弟という複雑なプロットで構成される物語に、旧約聖書の話を完全に再現すること自体不可能なのであるし、グルーシェニカに子どもがいたという設定にするわけにもいかない。この制限された状況の中で、作者がモークロエ村の場面に他ならぬカルガーノフとマクシーモフを配置したことこそが重要なのであり、２人とも、無条件に愛される彼女の身内としての役割をはたしているという点では何ら変わりはない。

ロトの妻とドミートリー

ここでロトの妻についても触れておきたい。

聖書ではロトの妻は、御使いたちの教えに背き、ふりかえったために塩の柱になってしまったのだが、ドミートリーもまた、父親のフョードル・パーヴロヴィチ・カラマーゾフ殺しの容疑者として捕まる際に同様の行為を行っている。

「そばにいるとも」彼女の服や胸や腕にキスしながら、ミーチャはささやいた。と突然、何か妙な気がした。まっすぐ前を見つめている彼女が、彼の顔ではなく、彼の頭の上の方を異様なほどじっと、食い入るように見つめているような気がしたのだ。ほとんどおびえに近いおどろきの色が、突然、彼女の顔にあらわれた。

「ミーチャ、あそこからこっちをのぞいているの、だれかしら？」ふいに彼女がささやいた。ミーチャはふりかえり обернулся、本当にだれかがカーテンをかきわけて、二人を眺めているらしいのに気づいた。（１４、３９９）

聖書では оглянуться という単語が使われており[20]、顔だけ振り向くという意味を持っている。いっぽう『カラマーゾフの兄弟』では обернуться という単語が用いられており、上半身を振り向けるという微妙なニュアンスの違いはあるものの、後ろを向くという行為が破滅に直結しているという点で類似している。ドストエフスキーはグルーシェニカと結ばれたドミートリーをロトの妻に見立て、同様のパターンで破滅させたと見ることができるのだ。ロトの妻は神の裁きをうけ、ドミートリーは法の裁きを受ける。

[20] Библия：книги священного писания Ветхого и Нового Завета/Москва：Московской патриархии より抜粋

聖書のパロディーの結論

以上の類似点からを総合的に判断すると、ドストエフスキーが『ソドムの滅亡』のシーンというからくりを、もっと秘密裏に、しかし確信的にモークロエ村の場面に持ち込んだということが十分に考えられる。

そうすると、先程カーニバル論で証明を試みた３人の登場人物（ヴルブレフスキー、カルガーノフ、マクシーモフ）の人物配置における作者の意図についても、新しく見直す必要が出てくる。それはつまり、ドストエフスキーがこのシーンをソドムの場面に模するために彼ら３人を配置したのではないかと考えてみる必要性のことである。そこで、その際に作者は旧約聖書と比べて足りない人数の不足を補うために、ヴルブレフスキーは二人の御使いを成立させるためのかたわれとして、マクシーモフとカルガーノフをロトの娘役として描いたのではないかということだ。

展開の異なり

ドストエフスキーがこの場面を旧約聖書になぞらえているというこの仮説に対するもっともな反論は、「登場人物は偶然同じだったかもしれないが、その後の展開がまるで違う」というものだろう。確かに旧約聖書どおりの筋書きならば、ドミートリーはソドムの男という完全な悪役としてモークロエ村の宿に押しかけるものの、娘達（カルガーノフとマクシーモフ）を身代わりに差し出されて、それでも満足出来ずに、結局は御使い達（ポーランド人達）によって目潰しを食わされ、彼らのいる部屋にすら入れさせてはもらえない。そしてロトであるグルーシェニカは、ポーランド人達と新しい世界に旅たち、ドミートリーは神の裁きを受け（ピストル自殺によって破滅する）、常軌を逸したような祝宴そのものが起こりえない、という筋書きになっているはずである。しかし物語の展開はそうではない。そこでは冒頭に紹介したカーニバル論が典型的にあてはまるようなストーリーが展開される。

グルーシェニカに、パン・ムッシャーロヴィチと会うことについて「知らないわ、知ったらあたしを殺すに違いないわ」と恐れられていたドミートリーは危害を加えるためにではなく、「そばを通り抜けていく」彼女を祝福するためにモークロエ村に現われる。そこではカルガーノフに歓迎され、彼女も「こんな瞬間に彼がこんな風に入ってきて、こんな話し方をしようとは、まるきり思わなかった」態度だったために同席を許されて無事部屋へ入ることが出来る。一方グルーシェニカを迎えに来た、御使いの 1 人であるはずのパン・ムッシャーロヴィチは、以前の「若い鷹」から「ただの鴨」へと成り下がっていて、トランプ賭博の中でイカサマを行ない、グルーシェニカを迎えに来たのも単に金目当てだということも暴露され、他の部屋へ閉じこめられてしまう。そしてその後に行なわれるヴルブレフスキーが「まるでソドムだ！」と形容したどんちゃん騒ぎの中で、ロトであるグルー

シェニカと、ソドムの男であるドミートリーは、愛を交わすに至るのである。

確かにこのような展開のズレというものは、ドストエフスキーがモークロエ村のシーンを忠実に旧約聖書に正確になぞらえようとしたならば、あってはいけないことであり、仮説を覆す決定的な証拠となりうるだろう。だがしかし、このズレ、つまり旧約聖書のパロディー化こそがドストエフスキーの本来の目的だと考えてみることは出来ないだろうか。だとすれば、その理由はいったい何なのだろうか。

4.作者の真の意図を探る

ドミートリーとグルーシェニカのモークロエ村の場面の前後で変化する世界観

ここでドミートリーがポーランド人を閉じこめた後に始まる常軌を逸した宴会の中でグルーシェニカが語った言葉に注目したい。彼女は酩酊と興奮の中で、ドミートリーに対してこういっている。「あたしが神様だったら、全ての人を許してあげるのだけれど。『愛すべき罪人たちよ、今日以後みんなを許してあげるわ』って。…あたしたちは汚れていても、この世は素敵だわ。あたしたちだって汚れていても、いい人間なのよ。汚れてもいるし、いい人間でもあるってわけ…」（１４、３９７）ここで述べられている神とは旧約聖書で述べられているようなソドムを滅ぼした神とは性質が全く違うし、モークロエ村の道中、馬車の中でドミートリーが恐れ続けていた裁きの神とも異なっている。

そもそも旧約聖書と新約聖書の違いとは、神との契約の違いである。もともと旧約聖書における契約とは、モーセがシナイ山で神と交わした約束のことであり、十戒やそれ以外の様々な取り決めのことである。神は、モーセと「私を否むものには、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問うが、私を愛し、私の戒めを守るものには、幾千代にも及ぶ慈しみをあたえる。」（出エジプト記２０）という内容で、契約を交わした。

ソドムの住民達が神に滅亡させられた理由については、『ソドムの滅亡』の中では「主に対して多くの罪を犯していた」（創世記１３：１３）という抽象的な記述しかなされてはいない。しかし、ソドム、ゴモラの破滅は、神の徹底したさばきの例として強烈な印象を残していて、聖書の中でも様々な箇所で引用されている。詩篇を例にあげてみよう。

主は、主に従う人と逆らう者を調べ
不法を愛するものを憎み
逆らう者に災いの火を降らせ、熱風を送り
燃える硫黄をその杯に注がれる。（詩篇１１：５～６）

ソドムとゴモラの街は主に逆らった罰として滅亡させられてしまったのだ。

ドミートリーもまた旧約聖書では、無条件に罰せられるべき存在であるといえるだろう。彼はモーセが神と交わす十戒の多くで背いている。彼はまず「姦淫してはならない」という戒めを犯している。彼はアレクセイとの会話の中で、以前の放蕩を告白している。

「今日、レディーが俺の彼女でも、明日は街の売春婦がその後釜って寸法だ。…一度、町じゅうでのピクニックがあって、七台のトロイカでくりだしたんだ。冬のこととて、真っ暗な橇の中で俺は隣にいた娘の手を握りはじめて、強引にキスまで持っていった。可憐な、いじらしい、おとなしくて素直な、官吏の娘だったがね。させてくれたよ、暗闇の中でずいぶんいろいろなことをゆるしてくれた。かわいそうに、明日にも俺が迎えに行って、プロポーズするものと思っていたのさ…。ところが俺はその後一言も彼女と口をきかずだ、五ヶ月もの間ただの一言もかけなかったんだよ。よくダンスなんぞしているとき（あそこじゃ、のべつダンスをしたもんさ)、広間の隅からその子の目がじっと俺を見守っているのに気づいたし、その目が炎に、おとなしい怒りの炎に燃えているのに気づきもした。そういう遊びは、俺が体内に飼っている虫けらの情欲を楽しませてくれるばかりなんだ。」（１４、１００）

また、彼は「盗んではならない」という戒めも破っている。彼はカテリーナ・イワーノブナから預かった 3000 ルーブルもの大金をグルーシェニカの為に、一日で使い果たしてしまった。彼はその事件をアレクセイに告白する前に、「…この俺はこそ泥で、すりで、空き巣ねらいなんだよ。…」と自嘲する。またドミートリーは「あなたの父母を敬え」という戒律も破っている。ここで触れておきたいのは、神との古い契約の中で定められた死に値する罪についてである。その中の一つにこうある。「自分の父あるいは母を呪う者は、必ず死刑に処せられる」(出エジプト記２１：１７)。グルーシェニカを父親であるフョードル・パーヴロヴィッチ・カラマーゾフと奪い合っていた彼は、彼女が父親のもとへ行ったと勘違いして逆上し、フョードルの邸宅に侵入する。そこで彼は、誤って自分を育ててくれた下男であるグリゴーリーの頭部を銅の杵で殴ってしまう。グリゴーリーは幸運にも死んではいなかったが、生みの父親を殺そうとして、誤って育ての父親に手をかけてしまったドミートリーは、神との古い契約では死という罰を受けなくてはいけない存在なのだ。その後グルーシェニカがパン・ムッシャーロヴィチのもとへ向ったと知ったドミートリーは、グリゴーリーの生死も判らぬまま、「自己を処刑し、罰する」とペンでしたためられた遺書をポケットに入れ、自殺のためのピストルを調達し、酒やごちそうを山ほど買って「自分のそばを通り抜けていく」彼女を祝福するために、最後の「どんちゃん騒ぎと言っていいほどの派手な酒盛り」を開くために、モークロエ村に向うのである。道中馬車の中で彼は、御者に対して、「御者は人を轢いちゃいかん！人を轢いてはならんし、人の生活を台無しにしてもいけないのだ。もし、人の生活を台無しにしたら、自分を罰することだ…人の生活をだいなしにしたり、命を奪ったりしたら、自分を罰して消え去らにゃいけないんだぞ」（１４、３７１）とヒステリックに叫び、また「主よ、無法の限りをつくしてきた私を、そのまま受け入れてください。ですが、わたしを裁かないでください。あなたのお裁きなしで通してください。…わたしはみずから自分を裁いたのですから、どうか裁かないでください。主よ、あなたを愛しているのですから、裁かないでください！汚らわしいわたしですが、それでもあなたを愛しているのです。」（１４、３７２）と裁きの神に対して懇願

する。異常な精神状況のなか、ドミートリーはグルーシェニカ達のいる部屋へと乗り込んでいく。

一方新約聖書で神と交わした契約は、戒め（律法）を守ることではない。

「律法の実行に頼るものはみな呪われています。『律法の書に書かれているすべてのことを絶えず守らないものは皆、呪われている』と書いてあるからです」（ガラテヤ信徒への手紙３－１０）。

新しい契約とは、キリストが神と交わした新しい契約のことであり、その契約に基づいて、ただ信仰によってのみ人は神に義とされるのである（ローマの信徒への手紙３：２１～２８）。

モークロエ村の場面以前の、神の罰を恐れるドミートリーと、モークロエ村の場面以後の許しの神について述べるグルーシェニカを比較することにより、このシーンが、少なくともグルーシェニカにおいては新・旧の聖書的世界観の転換点として働いていることに気づいていただけるだろう。

ドストエフスキーと新約聖書的（キリスト的）人類愛

新約聖書的な人類愛はドストエフスキーにおける人間の完成形であり、彼はシベリアで最初の妻であるマリア・ドミートリエブナを失った翌日ノートに人間の完成について書き写している。

「キリストの戒律に従って人間を自分自身と同じように愛することは不可能である。地上における個の法則に我々は縛られる。自我がこれを阻止する。これを成し遂げたのはただキリスト一人だけであるが、しかしキリストは人間が常にそれを目指し、また自然の法則によって目指さざるを得ない、開闢以来の理想である。だが、それはそれとして、肉体をそなえた人間の理想としてのキリスト出現以後、個の最高の究極的発達は（発達の最終段階、いよいよ目的を達せんとするその時点で）まさにそのゴールに到達すべきものであることが、白日のごとく明らかになった。人間がそのゴールを発見し、それを認識した上で、自然から与えられた自己の天性の総力を挙げて、人間をその個から、自我の充実から切り離すことの出来る最高の使い方、それは言って見れば、その自我を抹消して、それを丸ごとすべての人に譲り渡すことであると、確信するに至るためなのである。…[21]」

ドストエフスキーは「罪と罰」のラスコーリニコフには、このようなキリスト的愛への認識と服従までに、英雄的選民思想による金貸し老婆の殺害、そして思いがけぬ罪の意識へのおびえと人類との断絶感による苦しみ、清らかな心を持ったソーニャとの出会い、そして自首を決意しシベリアへの流刑といったような様々な試練を与えており、「カラマーゾフの兄弟」でも同じくドミートリーやグルーシェニカを極限的な状況に追い込んでいる。

[21] 『ドストエフスキー未公刊ノート』／小沼文彦訳／筑摩書房／１９９７／ｐ２０．１１

自身がペトラシェフスキー事件で危うく処刑されそうになり、その刑罰としての流刑生活の中でキリスト教へ帰依したドストエフスキーにとって、神への愛の到達への道筋として絶望的な挫折、既存の価値観の破壊というものは必然というよりは最早自然とさえいえるものであったろう。グルーシェニカは、以前は自分の侮辱に執着し、悪意を愛していた。だが昔の男の再来によって、以前の醜悪な生活に別れを告げ、新しい生活に期待する。だんがその時点では、彼女はまだ滅び行くソドムを見捨て、選民として自分だけが家族を連れて逃げ出していくロトと同じであり、旧約聖書的な世界観の枠に閉じこめられたままである。ドストエフスキーにとって、グルーシェニカをキリスト的人類愛へ導かせる為には旧約聖書的世界観の破壊が必要不可欠だった。現に彼女の精神はモークロエ村で起こった一連の出来事により、輝かしく飛躍をみせる。彼女はソドムを選択し、ドミートリーと愛を交わす。そして許しの神について述べている。

そしてその後の予審の場面でもドミートリーをかばっている。

「二人いっしょに裁いてください！」なおもひざまずいたまま、グルーシェニカが狂ったように叫びつづけた。「二人いっしょに裁いてください、今この人といっしょになら、たとえ死刑でも喜んで受けます！」（１４、４１２）

またその後の裁判の場面でも聖のイメージを取り戻している。

グルーシェニカは中腰になり、聖像にうやうやしく十字を切った。
「主よ、汝に栄光あれ！」（１４、４５５）

イワンとドミートリー

一方ゴロソフケルの説によると、『カラマーゾフの兄弟』はカントのテーゼとアンチテーゼとの間との和解しがたい論争を、小説化したものであるという。テーゼを示すシンボルが象徴するのは、不死－自由－神であり、アンチテーゼを示す言葉が象徴するのは、自然必然性－空虚－無限－絶滅である。テーゼもアンチテーゼもそれぞれ所在する次元が違うし、経験論的に実証する事も不可能なのでどちらが正しいかわからない。イワン・カラマーゾフはこのアンチノミー（二律背反）を解決しようとして苦しみ、発狂したのだという。

ゴロソフケルによれば、アンチノミーの天秤棒の上での永久動揺、つまり二重世界は、カントにとって人間の理性の避けがたい錯覚である。その錯覚を認識した上でのそこからの脱出を、カントは定言命法に求める。ドストエフスキーはというと、この錯覚をむしろ実在として受け入れる。つまりドミートリーの姿において、「二重世界の矛盾を受け入れ、実体化した矛盾にひそむ生活の意味を高唱するほかになかったのである。」「問題はテーゼ、またはアンチテーゼにあるのではなく、それらの永久の決闘にある。それはミーチャにとって秘密と神秘の結合であり、悲劇的で悪魔的な美としての生活を彼に開いてくれるものな

のである。要は戦闘にあるのであって、どちらかの側の勝利にあるのではない。要は巨人族と神々の戦い、つまり闘争にある。そしてミーチャの巨人的魂がこの生活を喜び、迎え、受け入れたのである。[22]」

ドミートリーにとってテーゼ＝マドンナの理想は、アンチテーゼ＝ソドムの理想の反対にある、相反する矛盾した価値観などではない。同時にどちらも人間の中に内包されている相対的価値観だからである。つまりドミートリーはソドムの理想を抱きつつもマドンナの理想に燃えている存在であり、グルーシェニカもまた、単なるソドムの理想の象徴などという一面的な存在ではなく、同時にマドンナの理想の象徴でもあるのだ。そしてモークロエ村の場面で、神の支配する聖書的な世界観のうちで、ソドム的な美とマドンナ的な美はグルーシェニカという対象の中で、束の間ではあるものの戦いの手を休め、1つに溶け合い、死を決意していたドミートリーに生への道を開かせたのである。

ドミートリーは逮捕された後、乳をもらえない『童 ДИТЁ』の夢の中で、生に対する希望と熱意を確固として取り戻す。

「あたしもいっしょよ。これからはあなたを見捨てはしない。一生あなたと一緒に行くわ」感情のこもったやさしいグルーシェニカの言葉が、すぐ耳もとできこえる。とたんに心が燃え上がり、何かの光をめざして突きすすむ。生きていたい、生きていたい и хочется ему жить и жить、よび招くその新しい光に向かって、何らかの道をどこまでも歩きつづけていきたい、それもなるべく早く、一刻も早く、今すぐに、たった今からだ！」（１４、４５７）

ドストエフスキーは矛盾するテーゼとアンチテーゼの両者を受け入れ、生きることによってその永久の格闘を希望を持って突き進むドミートリーによって、発病するイワンに代表されるアンチノミーのニヒリズムを乗り越えさせたのではないだろうか。

エピローグ

ドストエフスキーはグルーシェニカの「堕落の底に身を沈め、深き汚れに閉ざされている」ソドム的な生活をテーゼとし、新しい生活への期待と堕落した生活、カラマーゾフ的なものとの決別という旧約聖書的選民思想と救いをアンチテーゼとした上で、モークロエ村にその象徴として旧約聖書的世界を登場させている。そしてそのシーンをパロディー化することによって、新約聖書的あるいはキリスト的な、許しの神をベースとしてソドム的美とマドンナ的美の融合を行っている。

しかし、『カラマーゾフの兄弟』において、その気高い思想が啓蒙的に幸福な作品の終末として描かれるということはまず無い。ツゥルナイゼンはこう指摘している。

---

[22] 『ドストエフスキーとカント』／ゴロソフケル著／木下豊房訳／みすず書房／１９８８／ｐ１８５．１１５、「訳者あとがき」より

「神問題が彼の全著作の問題である。…既にその初め、彼がそのヒーローの外貌、彼らの登場、彼らの行動の発端を叙するところに、救いを求めて叫ぶ彼らの人間性の謎全体が表現されており、この謎の展開が著書の広大な全内容をなすのである。な彼ら全ては、初めも終わりもない一筋の道を歩む。なるほど途上に色々なことがある―数多い、偉大な、又驚嘆すべきことが起こる。そしてその度に人は最後に尋ねるのである―本当に何が起こったのか？何かの変化があったか？重苦しい謎が首尾よく解決されたか？社会は革新されたか、或いはそれとも少なくともその革新の道が見出され提示されたか？悪魔が天使となったか、或いは少なくとも人間が聖者となったか？そして答えは常にただ次のごとくである。かかる事は何一つ起こらなかった！人は結びに於いて決して結びに来ていないのである。社会は依然として疑雲に包まれ腐敗しており、各人も疑雲に包まれ未完成である。巻末において、ドイツ文学の有名な発展小説に見るが如き、熟達した、清められ純化された人物は、我らの前に立たないのである。むしろその反対が現れる。シベリアの牢獄が「ラスコーリニコフ」と「カラマーゾフ」との終わりであり、「悪霊」の中の一ヒーロー、スタブローギンは最後に縊死し、白痴は再びその神経病院に帰るのである―しかも！何かが起こっている、何かが現れている。即ち、あらゆる人間の疑わしさは一層大となり、あらゆる存在の持つ問題性は初めて正当に震撼されて、神にあるその最後の解決に向かって歩むのである。これが結果である！[23]」

彼の指摘する通り、モークロエ村の場面後の主な登場人物を追っていくと、彼らの性格や思想がモークロエ村の前後で劇的に変化するということはない。

ドミートリーは冤罪にもかかわらず誤審で流刑を言い渡される。ドミートリーは神の裁きは受けなかったが、結局、人間による裁判にかけられ、裁かれる。

グルーシェニカは、ドミートリーに対する愛に目覚め、かれに付き従おうとするものの、今度はカテリーナ・イワーノブナに対する嫉妬に狂っている。

イワンは神の存在の有無やドミートリーの無実、有罪などの極度のストレスから譫妄症にかかってしまう。

エピローグの３、「イリューシェチカの葬式。石のそばでの演説」で、「カラマーゾフ万歳」と子供達に称揚されるアリョーシャですら、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』第二部の構想のなかでは、多くの研究家たちの指摘するところによると、革命家になって皇帝暗殺の計画に加わり、断頭台に上ることになっていたという。[24]

しかしこのような現実世界の不条理さをあくまで直視するドストエフスキーの残酷なまでのプロット設定の中でだからこそ、モークロエ村の、カーニバル化された非日常的な空間の中で繰り広げられる、瞬間的ではあるが、幻想的な美と自我を捨てた旧約聖書をパロディー化した上に成り立つ、新約聖書的な他者に対する愛に包まれた世界がますます際立ち輝くのであろう。

---

[23] 『ドストエフスキー文献集成１０巻ドストエフスキー研究―弁証法神学より観たる―』／ツゥルナイゼン／丸川仁夫訳／大空社／１９９５年／ｐ６５、ｌ４

[24] 『謎解きカラマーゾフの兄弟』／ｐ３０、１１５